

2018年6月10日（日）「子どものように」

マタイ 18:1-5

1 そのとき、弟子たちがイエスのところに来て言った。「それでは、天の御国では、だれが一番偉いのでしょうか。」2 そこで、イエスは小さい子どもを呼び寄せ、彼らの真ん中に立たせて、3 言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、入れません。4 だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。5 また、だれでも、このような子どものひとりを、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。

【序論】

皆様は近年キリスト教界で問題になっている「繁栄の福音」についてお聞きになったことがあるでしょうか。繁栄の福音とは、物質的繁栄を霊的祝福のしるしとして見る見方です。2010年にケープタウンで開催された第三回ローザンヌ世界宣教会議には、198か国から4,200名の福音派リーダーが集まりました。その時の決意表明がまとめられ、日本でも2012年に『ケープタウン^{コミットメント}決意表明』という本が出版されました。その中で「繁栄の福音」が問題視されている箇所があります。

「世界中に広まっている『繁栄の福音』の説き明かしと教えは、大いに懸念すべき事態である。私たちは繁栄の福音を次のように定義する。すなわち、信者は健康と富という祝福を得る権利を持ち、また信仰の肯定的告白と、金銭また物質の捧げものによる『種まき』を通して、これらの祝福を入手することができる、とする教えである。」¹

宗教は常に金儲けの手段となる危険性を孕んでいます。これは新興宗教だけでなく、健全であったはずのキリスト教会にもいつの間にか入り込んでいる罠です。

「聖書は人の繁栄を喜ばしいこととしていること、そして神の祝福についての聖書の教えの中には、目に見える祝福（健康についても富についても）を含めている箇所もあることを私たちは確認する。しかし、霊的な祝福は、物質的な祝福によって測定可能であるという教え、また富はつねに神の祝福のしるしであるという教えについては、聖書的でないものとして私たちは退ける。聖書には、富はしばしば抑圧、ごまかし、汚職によって獲得されることがあると描かれている。」²

¹ 『ケープタウン決意表明』 p.83（傍点：奥村）

² 前掲書 p.84（傍点：奥村）

【本論】

「繁栄の福音」の根底には「食欲」という問題があるでしょう。食欲は時に、名誉欲、支配欲といった形で顔を出し、信仰共同体を苦しめます。今日の箇所では主の弟子たちが話題にしている事柄の根底には、やはり「食欲」の問題があるでしょう。

本論 1. 弟子たちの考え方の根拠

そのとき、弟子たちがイエスのところに来て言った。「それでは、天の御国では、だれが一番偉いのでしょうか。」(18:1)

まず私たちは、このような子どもじみた質問が出ること自体に何か違和感を覚えるかも知れません。「誰が一番偉いか」などという議論は小学生レベルであり、実際私は小学校3年生くらいの時にそんな喧嘩がクラスであったのを覚えています(その時の結論は、一番喧嘩が強い少年が一番偉いということになったと記憶しています)。ですが、ここで主の弟子たちがやり合っていることは、恐らくそれとは次元を異にするものだったでしょう。彼らの念頭にあるのは、主イエスを中心とした新生イスラエル王国であり、今既に主の弟子である彼らはその王国でトップの地位に就くことが予想された。かつてダビデが治めたイスラエル王国は経済的にも繁栄しましたから、もし王の側近となればあらゆる面での保証が期待できたのです。今まで帝国から税金を取られていた立場は逆転し、諸外国民から税金を取る立場に立つかも知れない。ゆえに、十二人にとって誰が右大臣・左大臣になるかは、今後の進退を決定する重要な問題だったのです。

それにしても、この弟子たちの間での優位争いは、隠れたところで火花を散らしていたことが福音書の様々な箇所から分かります。マルコの並行記事によると、この度の議論はカペナウムへの道中で弟子たちが密かに論じ合っていたのを主イエスが見抜かれ、「道で何を論じ合っていたのか」と問いかけたとなっている(マルコ 9:33-37/ルカ 9:46-48 も参照)。また、マタイ 20 章では何とゼベダイの子ヤコブとヨハネが母親と一緒に主イエスにトップの座を願い求めているという記事まで出てくる(マタイ 20:20-23)。そして、それを知った他の弟子たちが腹を立てたとも(20:24)。これほどまでに上に立ちたがる弟子たちの心理というのは、ちょっと理解しきれぬものがあるのですが、それが家族を巻き込んだ熾烈な争いであったことは読者の目にも明らかです。

この度このような話題となった発端を考えますと、恐らく主イエスが 12 人の内 3 人だけを連れて山に登ったことや(17:1-13)、ペテロの税金だけを主が工面してあげたこと(17:24-27)から妬みが生じたのでしょう。そして、徐々にペテロの優位性が明らか

になり、ヤコブとヨハネが二番手に置かれている雰囲気が漂い始めている今、他の弟子たちの心は穏やかではありませんでした。焦り、妬みの渦が共同体の中で渦巻き、事あるごとにそれが噴出してきていたのです。

習い事をしたことのある方は、このような弟子の心理が幾分理解できるのではないのでしょうか。私たちには、自分が習っている先生に気に入られたいという思いがどこかにあります。尊敬する先生であればあるほど。そして、いつしか自分が特別扱いされているような錯覚を覚えてしまうことがある。ところが、他の生徒が自分と同じようにかわいがられているのを見ると、悔しさや妬みが生じてくるのです。これは、弟子の身分にある人にはしつこく付きまとう心理ではないのでしょうか。指導者の中に^{ひいき}・^{えこひいき}の意識がまったくなかったとしても、弟子の側が勝手に妬み争うということがあるので

す。

お恥ずかしい話を一つ。私は10年ほど前に、ピアノを習っている先生に「この曲が弾きたい」とレッスンをお願いしたことがあるのですが、その時は「まだちょっと早い」と言われ、退けられてしまいました。ところが、その数年後、他の生徒さんが、その曲を発表会で弾いているのを見て、何とも言えない感情が湧いてきたのを覚えています。俺はダメであいつはいいのか！と。実は今、10年越しでその曲に取り組むことが許されているのですが、こんな大人であっても、そういう childish な一面があるということに赤面するのであります。

本論2. 誰からも評価をされないような人こそ

そこで、イエスは小さい子どもを呼び寄せ、彼らの真ん中に立たせて、言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、入れません。だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。(18:2-4)

弟子たちの問いに対する主イエスの答えは、彼らの予想もしないものでした。主は彼らの問いには直接お答えにならず、一人の子どもを引き寄せ、彼らの真ん中に立たせ給いました。「^{παιδίον}」という言葉は、12歳以下の子どもを指しますが、恐らくここでは3～4歳の幼子が連れて来られたのでしょう。私たちの感覚では、子どもは尊厳ある存在であり、大切にされるべき者と考えられているかも知れません。しかし、1世紀のユダヤ社会では子どもは重要視されていなかったのです。仕事はできず、リーダーシップを取ることもできず、稼ぐこともできず、まだ知恵もなく、体も小さいので、生活上の戦力としては数えられなかった。ところが、主イエスは一人の子どもを大の男たちの真ん

中に連れて来て、この子どものようになれと言われた。

ここで主イエスが言っておられる「**あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、入れません**」という言葉は、天国に入れろということを前提に語っている弟子たちの意表を突くものだったことでしょう。主は「あなたがたはまだ天国に入るための基準にも達していない」と言っておられるのです。その基準とは「子どもになること」であります。弟子たちにとっては心外であり、こんなガキと比べられてたまるか！という気持ちになったに違いありません。

では、子どもになるとは具体的にどういうことなのか。確かに、大人から見て、子どもという存在は多くの素晴らしい面を備えています。囚われがなく、無邪気で、悪い策略を練らず、柔軟で、感受性が豊かです。そして、赤ちゃんの笑顔には強^{こわ}面^{おもて}の男もとろけてしまいます。しかし、他方で子どもには子どもなりのプライドがあり、自己中心で、癪^{かんしゃく}癪^{しゃく}を起こすような性質も兼ね備えています。主イエスが言っておられるのは、恐らくこのような側面ではありません。むしろ、誰からも評価されないことを意にも介さぬ性質のことでしょう。自分が高く評価されることを求めない。なぜなら、自分は現に小さいのであり、誰かに頼らなければ生きられず、親に依存することが当然の生き物だと思っているからです。自分の小ささ、貧しさ、弱さの一切を当たり前を受け入れていること、これこそ主イエスが子どもを評価なさるポイントなのです。

主は弟子たちに「悔い改めて」と言われる。この言葉（στρέφω）の原意は「向きを変えること」であり、人がその人生の向きを変える、つまり悔い改めを意味するのです。新改訳 2017 では「向きを変えて」、新共同訳では「心を入れ替えて」と訳されています。つまり、主イエスは弟子たちに、子どもが自分の小ささ、無力さをそのまま受け入れているように、あなたがたも神の御前で小さく無力な存在であることを認めよと言っておられることになる。あるいは、子どもが全く親に依り頼むように、神に依り頼めと。

息子は（本人の許可を得て話しています）今でこそ一人で留守番ができるようになりましたが、しばらく前までは不安で不安で仕方がないと言っていました。親はそのような時、「どうして不安なの？」「なんでたった 20 分の留守番ができないの？」と責めるような言い方をしてしまいますが、これが親に対する子どもの依存心であり、主イエスが評価なさっているところだとしますと、私は自分の内に弟子たちと同じ「神の国から遠い」性質が潜んでいることを見て青くなるのです。

本論 3. 主イエスに対する子どもの関係

この世の原理は、経済力、腕力、知力、軍事力によって成り立っています。しかし、

神の国の原理では「神への全き依存」が最上の評価となる。この世で無力であればあるほど、神の御前には評価される。この逆説的原理は、能力がある人ほど受け入れ難いかも知れません。しかし、すべての能力と知力とを備えたイエス・キリストが、誰よりも低くなられた。

キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。（ピリピ2:6-8）

主イエスの弟子は主と同じ道を志し、どこまで低くなれるかが最大のゴールとなるのです。低くなる具体的な生き方とは、人に仕え、自分を与えること。完全に mature となった人は、そのような意味で子どものように低い者となるのです。

また、だれでも、このような子どものひとりを、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。（18:5）

主はここでも驚くべきことを言っておられる。これは、大人になった私たちが如何にして主イエスに受け入れられる者となるかのもう一つの側面を語っていると言えるでしょう。それは、無力な子どもを受け入れることだと言うのです。主はここで、子どもの内に自分自身を見ておられることになる。無力な子ども、親に完全に依存して生きている子ども。父なる神様にとって、主イエスとはそういう子どもなのです。だからこそ、子どもを受け入れることは、主イエスの心を受け入れることになる。そして、無力な子どもを受け入れる人には、同質の何かがある。これらのことが互いに繋がり合っているとすると、自分が果たして神に受け入れられ得る心を持っているかどうか問われてくるはずです。

今日の箇所を注意深く読みますと、2節で特定の子どもの登場したのに対し、5節では「このような子どものひとり」と一般化されていることが分かるでしょう。この思想は6節以下で「この小さい者たちのひとり」と言い換えられていきます。このことは何を意味するか。マタイ福音書全体を読んでいきますと、この表現は25章の「羊と山羊の譬」に出てくることが分かります（25:40, 45「この最も小さい者たちのひとり」）。ここでは、主は、旅人、裸でいる者、病人、牢に囚われている人とご自分とをある意味で同一視しておられる。つまり、これらの立場が弱く、この世の社会的地位を失ったかのような人々は、今日の「子ども」と同様に、神の御前で最も受け入れられ得る存在だということに繋がってくるのです。

このことから私たちは、自分の信仰のあり方を根底から見直させられるのではないのでしょうか。私たちはこの世の原理を信仰生活に、教会に持ち込んではいないか。能力主義、経済第一主義といったものが人を判断し、自分を判断する基準になってはいないか。

【結論】

初対面の牧師と挨拶を交わす時、「牧会何年目ですか？」という質問が出ることがあります。これは、もちろん純粋に、その人が主に仕えてきた年数を知りたいという思いから出てくる問いであり、私もそのように聞くことがあります。しかし、その年数の多い少ないは、その牧師の評価とは無縁なのです。神の目には年数は無価値です。同様に、信仰歴何年かということ人を人に説明する時でさえ、長ければ立派だということにはならない。むしろ、生まれたばかりの子どものような信仰を神が喜ばれるとすると、私たちはどんな時にも原点に戻らなくてはなりません。それと同時に、信仰は成熟もしなくてはならない。その成熟の証こそ、子どものような我儘^{わがまま}が取れることであり、どこまでもへりくだり、最後は十字架の恥辱を主イエスと共に味わいながら、この世の生涯を終えていくことであります。この世の栄光のすべてを捨て給うた主イエスに倣う者として、神と人に仕える者とされたいと願います。

【祈り】

子どもを愛し、「小さき者」とご自分とを一つに見られる主よ。厳しい御言葉を受けました。私たちはこの世の原理の下に生き、如何に能力を得るか、人の評価を勝ち取るかということに躍起になって生きているかも知れません。御言葉を知りながらも、競争社会に翻弄されている者です。しかし、どうぞ今もう一度、福音に生きる道を選択させてください。神の子が十字架にまで降り、すべての人に仕えてくださったように、私たちもへりくだって、人に自分を与える者に成長したく願います。神に依存することにおいては子どものように、人に仕えることにおいては成熟した者とならせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

三位一体の交わりの中で、御子の全き依存を喜び給う、父なる神の愛。

社会から評価されることなき子どもを愛し、「小さき者」の内にご自身を見出し給う、主イエス・キリストの恵み。

神への依存においては子どものように、人に仕えることにおいては成熟した者とならせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。